

よくこそ来つれ

大正期から戦後昭和期にかけて、ロンドンの大英博物館にアーサー・ウェイリーという日本の古典通の学芸員がいました。『源氏物語』の英訳『The Tale of Genji』は日本文学、文化への強い関心や憧れを欧米の知識層にかきたてました。

実はウェイリーは日本に来たことは一度もありません。のみならず現代日本語は喋れませんでした。古典の中の言葉しか理解できなかったのです。日本人研究者がロンドンにウェイリーを訪ねると、「よくこそ来つれ」と歓迎したそうです。

よく来たね、という挨拶の意味の古い文語表現ですが、私はこの逸話を思うと楽しくなります。ウェイリーにとって、日本とは古典の中にだけ存在する国だったのです。この遥かな国が好きで好きでたまらなかったのです。研究を通して、この遥かな国に生きようとしていたのです。ここに研究という行為のもっとも魅力的な原点がある、と私は思います。



学長 島田 修三